

東金市大関城跡

— 東金九十九里有料道路埋蔵文化財調査報告書 —

平成9年3月

千葉県道路公社

財団法人 千葉県文化財センター

とう がね おお せき じょう あと
東 金 市 大 関 城 跡

— 東金九十九里有料道路埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第301集として、千葉県道路公社の東金九十九里有料道路建設事業に伴って実施した東金市大関城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、平安時代の墨書土器や、中世の陶磁器が出土するなどこの地域の古代・中世の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が学術資料として、また郷土の歴史学習資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様にご心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

本文目次

I はじめに	1
1 調査の経緯	1
2 遺跡の位置と地理的環境	1
3 周辺の遺跡	1
4 大関城の歴史	3
5 大関城の構造	3
6 調査の方法	5
II 遺構と遺物	9
1 遺 構	9
2 遺 物	19
III まとめ	25
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第11図 溝実測図(4)	17
第2図 周辺地形図及び小字名	4	第12図 溝実測図(5)	17
第3図 基本土層図	5	第13図 SK001出土遺物	20
第4図 発掘区及び確認トレンチ配置図	7	第14図 SK004出土遺物	20
第5図 本調査範囲全体図	8	第15図 SK005出土遺物	20
第6図 SK001・SK002・SK003実測図	10	第16図 溝出土遺物図	21
第7図 SK004・SK005・SK006・SK007実測図	11	第17図 遺構外出土遺物図(1)	23
第8図 溝実測図(1)	14	第18図 遺構外出土遺物図(2)	24
第9図 溝実測図(2)	15	第19図 遺構外出土遺物図(3)	24
第10図 溝実測図(3)	16		

表目次

表1 溝計測表	18
---------	----

図版目次

図版1 大関城跡周辺航空写真	SD001～SD003周辺	SD004周辺	
図版2 調査区遠景	調査前遺跡近景	SD005・SD006周辺	SD016・SD017周辺
調査前遺跡近景	調査前遺跡近景	SD045～SD062周辺	SD052～D055周辺
SK001 遺物出土状況	SK002・SK003	図版4 遺物1	
SK004	SK005・SK006	図版5 遺物2	
図版3 SK005 遺構出土状況	SK007	図版6 遺物3	

凡 例

- 1 本書は、千葉県道路公社による東金九十九里有料道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県東金市依古島字中溝75-3ほかに所在する大関城跡（遺跡コード407-012）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県道路公社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長西山太郎、東部調査事務所長石田廣美の指導のもと、主任技師平野雅一が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成8年6月3日～平成8年8月31日
整理作業 平成8年9月2日～平成8年10月31日
- 5 本書の執筆は、主任技師 平野雅一が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県道路公社、東金市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東金」(N1-54-19-11)
国土地理院発行 1/50,000地形図「茂原」(N1-54-19-12)
第2・4図 東金市役所発行 1/2,500都市計画図「44-15」
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。
- 10 挿図に使用した記号の用例は、次のとおりである。
SK 土坑 SD 溝

I はじめに

1 調査の経緯

千葉県東部に位置する九十九里地域は、温暖な気候と、わが国有数の砂浜である九十九里浜を有し、主に東京・千葉方面から多くの観光客が訪れている。このため国道126号や県道東金豊海線等の主要な道路で交通渋滞が激しくなっている。そこで、千葉県道路公社では、これらの渋滞解消と周辺地域の生活環境の向上、さらに千葉県の幹線道路網構想の一躍を担い、地域の幹線道路となるよう東金九十九里有料道路の工事を計画した。これに伴い県道路公社から千葉県教育委員会に予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、現地踏査したところ、予定地は、大関城跡¹⁾の東側に位置し、平安時代の依古島遺跡の範囲内であることが確認された。

そこで、協議の結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

2 遺跡の位置と地理的環境

大関城跡は、東金市依古島字中溝に所在する。東金市は、房総半島の東側中央部に位置し、市の南東部は、太平洋に接する九十九里浜、北西部は下総台地、上総丘陵に続いている。これらの台地から太平洋にかけての平野部は、かつて海や沼であった低地部分と砂丘（砂堤）などの微高地の部分で構成される。海岸部に沿って並ぶ10数列の砂堤は、大きく第Ⅰ～第Ⅲ砂堤帯に分けられている。第Ⅰ砂堤帯は縄文時代中期、第Ⅱ砂堤帯は縄文時代後期、第Ⅲ砂堤帯は古墳時代にそれぞれ形成された²⁾という。大関城跡の所在する依古島は、この第Ⅲ砂堤帯に立地し、現在の海岸線まで3.4kmの位置にある。標高は4m～5mを測り、現在は真亀川と南白亀川に挟まれた中間地点に立地している。

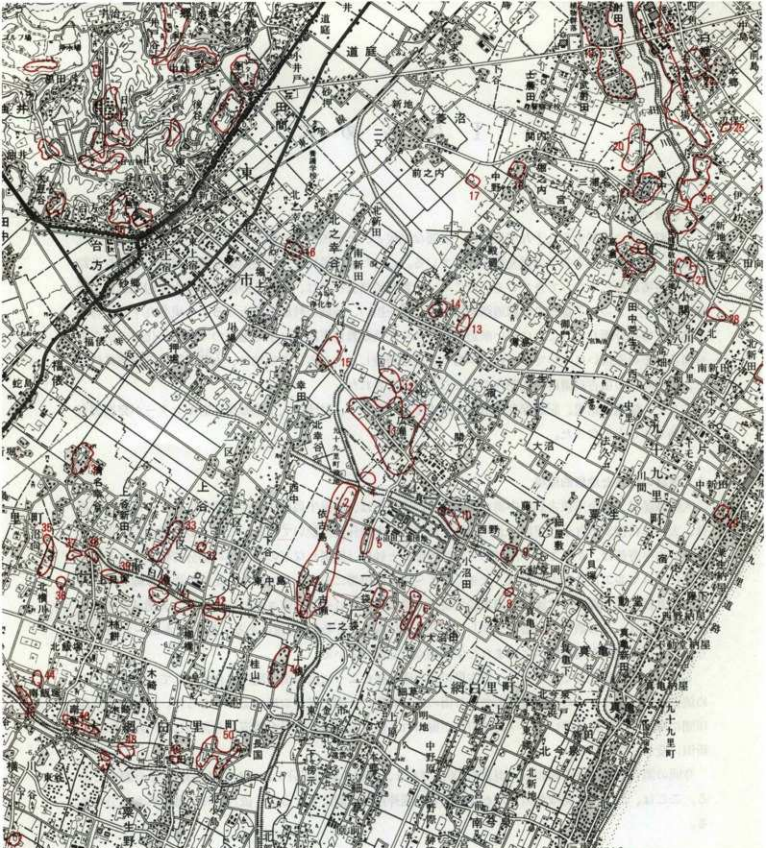
しかし、江戸時代まで真亀川は、依古島の北と南を挟むように流れ南白亀川に合流³⁾していた。そのため依古島の周りは全くの低湿地地帯であり雨の多い時期は、湖に浮かぶ島のようなであった。江戸時代享保年間に塚崎野の開発に伴い新川（真亀川）が掘られ、依古島周辺の水（大関沼とも言われる）も排水され、新田に変わっていった。

今回の調査範囲は東西約40m、南北約300mであり、前述の水田部分を含めた、微高地部分の調査である。ここは、かつて大関城があったと言われる大関神社の東側に当たるが、依古島の一番括れた部分である。

3 周辺の遺跡

東金市域の台地上には数多くの遺跡が存在するが、大関城が立地する低地部分にも、台地上に匹敵するぐらいの多くの遺跡が確認されている。しかし、残念ながら調査事例が少なく詳しい様子は分かっていない。ここでは、九十九里低地の遺跡を概観しておきたい。

縄文時代の遺跡は、依古島のすぐ東に当たる広瀬三ツ塚貝塚（4）、広瀬遺跡（11）で縄文後期の土器が出土している。南白亀川の西岸にある上貝塚遺跡⁴⁾（36）は小高春男氏などにより調査がなされ、縄文時代中期・後期の遺物が確認されている。



- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|----------|
| 1 大岡城跡 | 12 正気遺跡 | 23 白幡貝塚 | 34 清水奉谷城 | 45 経田遺跡 |
| 2 依古島遺跡 | 13 家徳東遺跡 | 24 白幡城跡 | 35 五十目遺跡 | 46 川間遺跡 |
| 3 福岡遺跡 | 14 家徳遺跡 | 25 荒塚遺跡 | 36 上貝塚 | 47 並塚遺跡 |
| 4 広瀬三ツ塚貝塚 | 15 堀上貝塚 | 26 稲山遺跡 | 37 関台遺跡 | 48 埋田遺跡 |
| 5 小沼田遺跡 | 16 北之幸谷館 | 27 宮ノ前遺跡 | 38 塚ノ下遺跡 | 49 北吉田遺跡 |
| 6 大沼田遺跡 | 17 中野館 | 28 鶴巻遺跡 | 39 北天王遺跡 | 50 入山岸遺跡 |
| 7 一之袋館 | 18 堀之内館跡 | 29 原形館跡 | 40 萩台遺跡 | |
| 8 神明前遺跡 | 19 武射田遺跡 | 30 東金城跡 | 41 大東遺跡 | |
| 9 西野城跡 | 20 荒久遺跡 | 31 東金御殿跡 | 42 北谷原遺跡 | |
| 10 吉新田遺跡 | 21 山王遺跡 | 32 上谷貝塚 | 43 宮ノ下遺跡 | |
| 11 広瀬遺跡 | 22 経塚遺跡 | 33 薬師堂遺跡 | 44 南飯塚貝塚 | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (50,000 : 1)

弥生時代の遺跡は、依古島の近くでは、広瀬遺跡、上貝塚で確認されている。作田川よりでは山王遺跡(21)、経塚遺跡(22)、南白亀川よりでは、塚ノ下遺跡(38)、入山津遺跡(50)などが確認されている。古墳時代では、堀上貝塚(15)、広瀬遺跡、上貝塚、並塚遺跡(47)、埋田遺跡(48)などが確認されているが数は少ない。

奈良・平安時代になると急激に遺跡の数が増加する。作田川西岸にある武射田遺跡(19)は低地の中でも中心的な集落であったことが想像される。八日市場市の平木遺跡⁴¹⁾では、厨の墨書土器が多数出土し、平野の微高地部分にも、郡家関係の施設があったことが想定されているが、武射田遺跡もそれに匹敵する遺跡である可能性が高い。大関城のある依古島も、奈良・平安時代の包含地として遺跡(2)の指定を受けている。周辺には、小沼田遺跡(5)、大沼田遺跡(6)、正気遺跡(12)、広瀬遺跡などもある。

中・近世の館跡も微高地上に存在する。今回の大関城(1)、そのほかに一の袋館(7)、西野城(9)、中野館(17)、北之幸谷館(16)、堀之内館(18)、屋形館(29)、清水幸谷城(34)がある。

調査例では、八日市場市の大堺・塔ノ前遺跡⁴²⁾から横須賀城関連の遺物が出土しているが、城跡全体が捉えられているわけではない。このように九十九里の低地にある城は、遺構をはっきり把握されていないのが現状である。

4 大関城の歴史

大関城⁴³⁾は元久元年(1204)安房から来た畠山重忠の一族によって築かれた⁴⁴⁾という。その後200年あまりたって、重康のときに二万八千石を領有して土気城を併せ守った。

このころ中野城(千葉市中野)にいた酒井定隆の勢力が伸長し、定隆は長享二年(1488)原氏の援助を借りて土気城を攻めて、重康を大関城に走らせた。定隆はその後何度も大関城を攻めたようである。

重康は孤城を16年間死守したが、大永六年(1526)十二月になると、東金城主酒井隆敏(定隆の子)によって攻められ、城兵は防ぎきれず、大関城は落城したという。

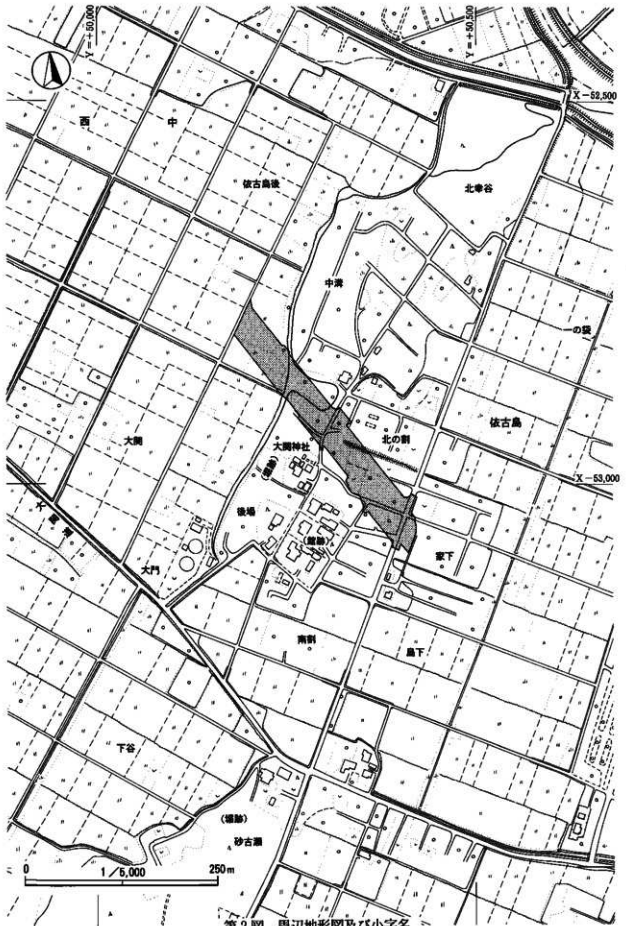
「上総国誌⁴⁵⁾」によると、隆敏は城を囲む深い泥に悩まされたらしく、正門に通ずる道は狭くて軍勢を進めることもできず、石橋三郎左衛門、栗原兵部亮らと協議して、間諜を城内に放って守将今関勘解由、山岸主悦と内通し、この二人に叛心を起こさせた。山岸主悦は重康が午睡している隙に刀を抜いて斬りかかり、その首をたずさえて酒井隆敏に降った。重康は城内で殺されたのではなく、上谷上福寺に逃れて自決して果てた⁴⁶⁾、という説もある。時に大永六年十二月二十日とされている。

東金市上谷字番場の常福寺境内に小さな祠があり、その中に玄勸大聖人と称する僧形の像が一体が安置されている。里伝によると、畠山重康が自刃したので里人が葬ったという。この像はもと甲冑を来た武人だったのをいつのころか、僧形のものに改めたのだという。毎年旧二月七日に盛大な祭事を行っているという。重康が死んだ後上福寺は開山したものだという説⁴⁰⁾もある。

5 大関城の構造

千葉県埋蔵文化財分布地図⁴⁷⁾によると、大関城の範囲は、依古島と砂古瀬を併せた範囲が城地とされている。これは、砂古瀬の依古島よりの山林中に堀跡、砂古瀬神社の辺りに物見台があったと言われ、これらを城の一部に含めるという考え方である。

また、この地域に残されている字名を見ると、西中から大関道を通って依古島に入る所が「大門」、人家の集まっている北西が「後場」、一度括れた北側が「中溝」と呼ばれている。人家周辺に単郭方形の館



があり、中溝の辺りに「死馬捨場」や「処刑場」があったという言い伝えも残されている。

そのほかに、大門から入ってすぐに主郭になるのでは防衛上弱いので、真亀川よりの一番奥の「北幸谷」の広い部分に館があったのではないかと考える方もいる。この「北幸谷」を「二の丸」¹⁾とする考えもある。しかしこれらを断定するには、かなり広範囲の調査が必要である。

6 調査の方法

調査区の設定は、調査区内を公共座標に合わせて、20m間隔の方眼を組み大グリットを構成した。それをさらに2m間隔で区切り、一辺2mで、計100個の正方形に分割して、遺構や遺物の位置を記録するグリットとした。大グリットは南北軸に北から南へアルファベットをふり、東西軸に西から東へ算用数字をふって、15-Eのように呼称した。

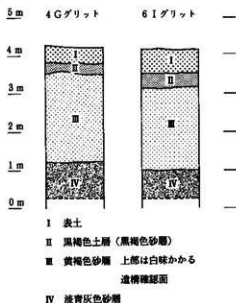
確認調査は、平成8年6月3日から7月15日、8月19日から8月23日と2回に分けて実施した。調査区は大きく分けると、水田だった部分を埋め立てた部分、畑が多かった砂堤部分、現在も水田として利用されている低地部分に分かれる。砂堤部分については、幅4mのトレンチを設定し遺構の確認を行った。近年植木畑として利用されていたため攪乱の部分が多かったが、一部黒褐色土が残っており、奈良、平安時代の遺物を出土する包含層を確認することができた。

水田を客土により埋めた部分は、多量の水が湧き出したため、2m×2mのグリットを設定し、クラムシェルにより掘り下げ、排土中の遺物の有無を確認した。

北側水田部分は、調査区のすぐ隣で耕作をしており、排水することが不可能であったので、稲の採り入れの終わった後に確認調査を行った。当初泥炭層が厚いだろうとの予想からクラムシェルによる確認を行ったが、意外にも砂の層がすぐに出てきたので、砂堤部と同じトレンチによる確認を行った。

その結果、砂堤部に数条の溝と土坑が確認され、平安時代の土師器等も検出したことから、3,000㎡を本調査することになった。

本調査は、平成8年7月16日から8月31日まで実施した。砂堤部の北側からバックホウで遺構検出面まで掘り下げてから調査を行った。



第3図 基本土層図

注1 千葉県地名辞典や東金市教育委員会の刊行物は、「おおせき」の呼称を用いているが、地元の人達は「おおせき」と呼んでいるので、本報告書では「おおせき」の呼称を用いた。

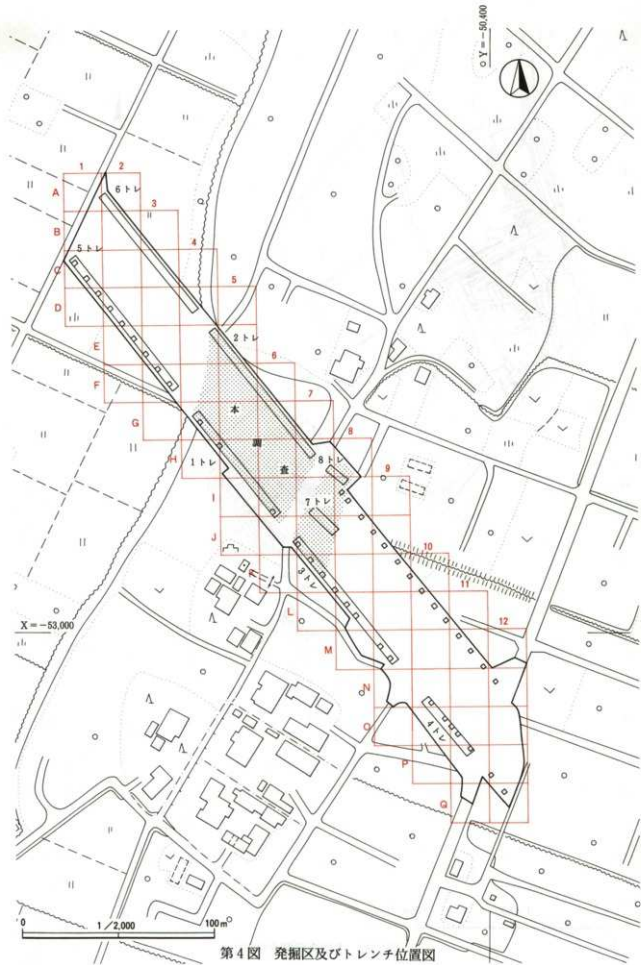
2 森脇 広 1974「九十九里平野の地形発達史」『第四紀研究』18-1

3 清水浦太郎編 1959「土気東金の両酒井」『東金史話』東金市教育委員会

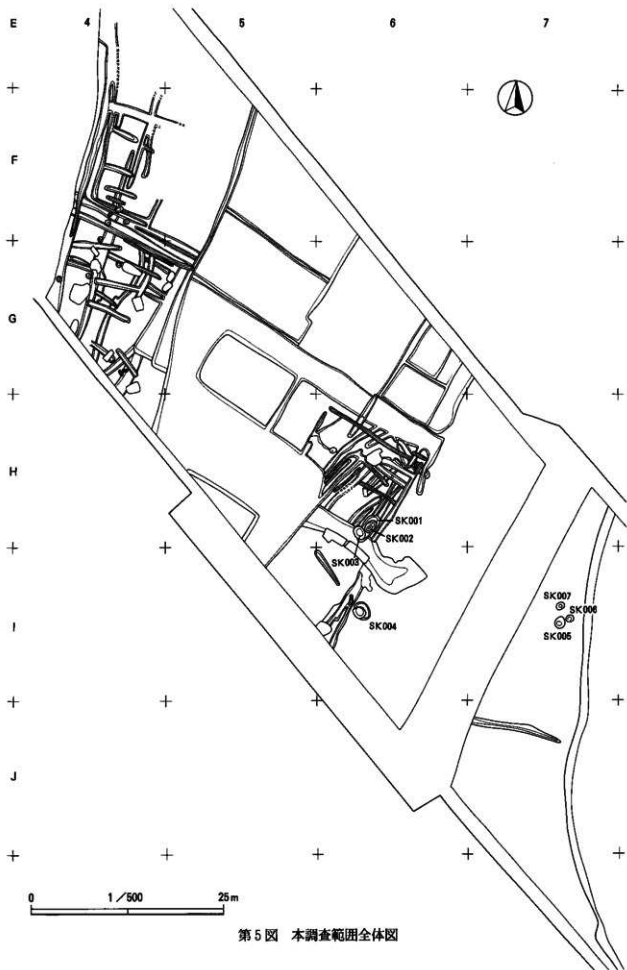
4 小高春男 1985「上貝塚発掘調査報告書」大網白里町市編纂室

5 小久貫隆史 1988『八日市場平木遺跡』(財)千葉県文化財センター

- 6 高田 博 1996『八日市場市大塚・塔ノ前遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 7 塚田源治郎 1976「大関城畠山氏小史」『東金市史資料編2』東金市役所
- 8 安川柳溪 1959「上総国誌」『改訂房総叢書第二輯史傳』改訂房総叢書刊行会
- 9・10 東金市史編纂委員会編 1993「東金酒井氏の大関城攻略・畠山氏の滅亡」『東金市史通史編上六』東金市役所
- 11 千葉県文化財センター 1986『千葉県埋蔵文化財分布地図 千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区』
- 12 府馬 清 1977「大関城址」『房総の古城址めぐり 上巻』



第4図 発掘区及びトレンチ位置図



第5図 本調査範囲全体図

II 遺構と遺物

1 遺 構

(1) 土 坑

調査区内で7基の土坑が検出された。SK001～SK004は時代的には遺物から平安時代、SK004～SK007は中世の所産と判断した。どちらも遺構の性格は明らかではないが、水辺近くの遺構であることは確かである。

SK001 (第5図 図版2)

6H区内南端に位置する土坑である。当初1つの土坑のつもりで掘り始めたが、下から土坑が2基検出された。上の土坑のみSK001とした。SD049、SD050の溝と重複している。平面形は、長楕円形で、開口部4.1m～3.45m深さ0.35mを計る。覆土は4層で、暗褐色砂層、黒色土層、黒褐色砂層、暗黄褐色砂層である。黒色土層は泥炭層状になっており、黒色土層と黒褐色砂層に遺物がまとまって出土し9点が図示できた。性格は井戸とかではなく水辺の遺構であろうか。

SK002 (第6図 図版2)

SK001の下から検出された土坑である。平面形は長楕円であり、開口部1.6m～1.1m、底面で1.2m～0.5m深さ0.5mを計る。覆土は5層で、白黄褐色砂層、暗褐色砂層、暗黄褐色砂層、白黄褐色砂層、黒色土層、暗褐色砂層である。遺物は出土しなかった。

SK003 (第6図 図版2)

黒褐色土、白砂混じりの層が交互に入る。底部は一部分が窪んでいる。SK001の下から検出された土坑である。平面形は長楕円であり、開口部1.65m～0.30m、底面で1.0m～0.5m、深さ0.5mを計る。覆土は6層で暗褐色砂層、暗黄褐色砂層、白黄褐色砂層、黒色土層、暗褐色砂層で、遺物は底部で杯の破片が2点出土した。

SK004 (第6図 図版2)

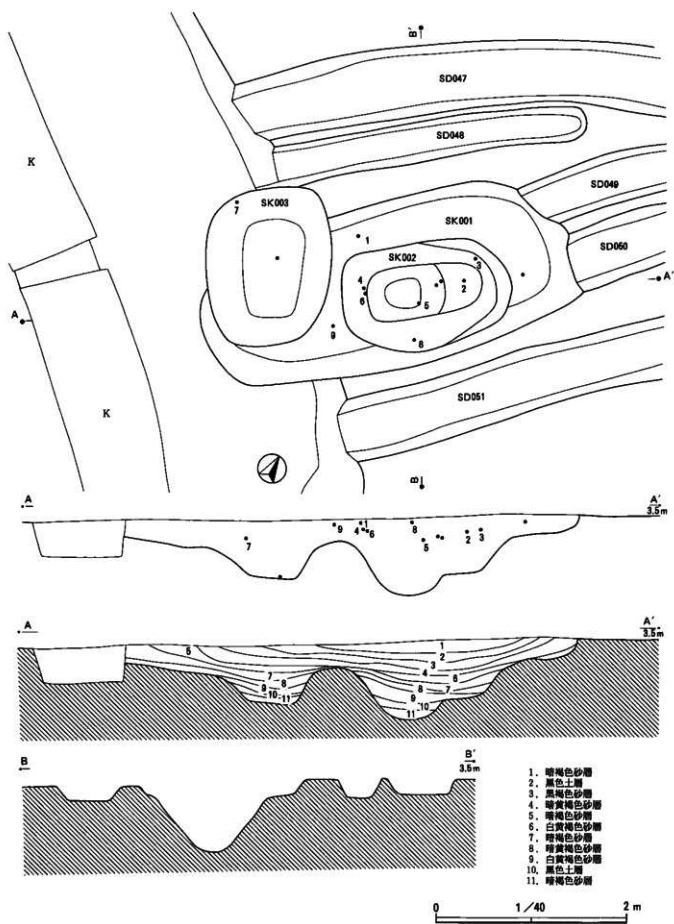
6I区内に位置する土坑である。平面形は変形の楕円である。一部テラス状になり窪んでいる。開口部は、2.22m～2.0m、中段1.64m～1.46m、底面で1.06m～0.9m深さ0.71mを計る。覆土は8層で、暗褐色砂層と白黄褐色砂層が交互に堆積し、底部近くの黒褐色砂層が泥炭層状であった。遺物はテラス状の部分から須恵器の杯1点が出土した。

SK005 (第6図 図版2)

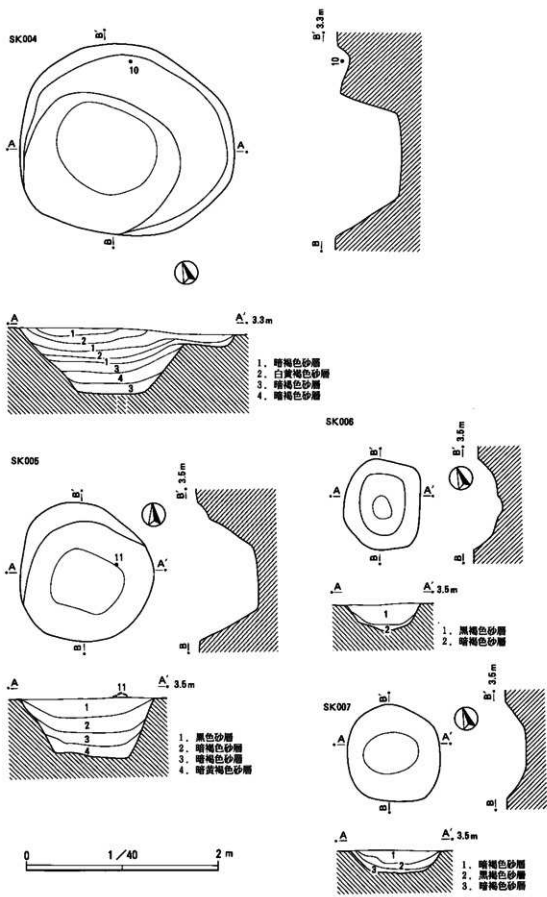
7I区内に位置する土坑である。平面形は隅丸方形である。開口部は、1.45m～1.4mで、底面で0.7m～0.55m、深さ0.65mを計る。覆土は黒色砂層、暗褐色砂層、暗褐色砂層、暗黄色砂層の4層である。遺物は土坑上面で、古瀬戸の碗が出土した。遺物から中世の土坑と捉えた。

SK006 (第6図 図版3)

7I区内に位置する土坑である。平面形は変形の隅丸方形である。開口部は、1.45m～0.75mで、底面で、0.5m～0.4m、深さ0.40mを計る。覆土は2層で、黒褐色砂層と暗褐色砂層である。底面中央にピット状の窪みがある。出土遺物はない。



第 6 图 SK001·002·003 实测图



第7圖 SK004・SK005・SK006・SK007実測圖

SK007 (第6図 図版3)

71区内に位置する土坑である。隅丸方形である。開口部は、1.00m～0.96m、底面で0.55m～0.45m深さ0.23mを計る。底面はほぼ皿状である。覆土は3層で、暗褐色砂層、黒褐色砂層、暗褐色砂層である。

(2) 溝

調査区から64条の溝が検出された。南北方向の溝や、北東から南西に流れる溝は、出土遺物を包含しており覆土も黒褐色土、黒褐色砂層を中心としているので、平安時代以降に構築した溝として捉えた。東西方向の溝は、中、近世以降の構築されたものと考えここでは、古いと思われる溝のみ記述した。その他の溝の計測値は18ページに掲載した。

SD002 (第8図 図版3)

4F-05から4G-93に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は25.64mで、上幅0.25m～1.03m下幅0.05m～0.80m、深さ0.05m～0.27mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層、暗褐色土層が主体であった。出土遺物は土器片が多く出土したが、図示できたのは2点である。途中SD10に切られている。

SD003 (第8図 図版3)

4F-05から4F-75に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は15.76mで、上幅0.40m～0.70m、下幅0.18m～0.31m、深さ0.08m～0.23mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層、暗褐色土層が主体であった。出土遺物は少量の土器片が出土し、1点の土器が図示できた。

SD004 (第8図 図版3)

4F-47から4G-60に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は24.48mで、上幅0.46m～1.78m、下幅0.25m～1.40m、深さ0.03m～0.20mを測る。溝底はほぼ平底で、覆土は黒褐色土層を主体にするものであった。出土遺物は比較的多くの土器片が出土し、3点の土器が図示できた。

SD005 (第9図 図版3)

4F-79から4G-75に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は22.80mで、上幅0.50m～0.80m、下幅0.30m～0.60m、深さ0.01m～0.09mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層が主体である。出土遺物は、少量の土器片を出土したが図示できたものはない。

SD006 (第9図 図版3)

4G-19から4G-38に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は5.69mで、上幅0.70m～0.92m、下幅0.45m～0.65m、深さ0.07m～0.14mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層が主体である。出土遺物は少量の土器片を出土したが図示できたものはない。

SD007 (第9図 図版3)

4G-77から4G-86に位置する北東から南西に延びる溝である。調査区内の総延長は4.92m、上幅0.82m～0.98m、下幅0.50m～0.60m、深さ0.05m～0.08mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層が主体である。出土遺物は少量の土器片を出土し、1点の土器が図示できた。

SD008 (第9図 図版3)

4G-78から4G-97に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は5.39m、上幅1.70～1.82m、下幅1.00m～1.28m、深さ0.14m～0.31mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色土層と暗褐色土層が主体で出土遺物は、少量の土器片を出土し1点の土器が図示できた。

SD009 (第8図 図版3)

4F-99から4F-67に位置する南北方向の溝である。調査区内の総延長は12.31mで、上幅0.40m～0.60m、下幅0.25m～0.30m深さ0.12m～0.14mを測る。溝底は平底で覆土は黒褐色土層を主体とする。出土遺物は、少量の土器片を出土したが図示できたものはない。硬化面は確認できなかったが、道として使われた可能性がある。

SD010 (第8図 図版3)

4F-30から4F-58に位置する南北方向の溝である。途中SD033に切られ、北はSD009に合流する。調査区内の総延長は5.51mで、上幅0.50m～0.65m、下幅0.25m～0.40m、深さ0.02m～0.11mである。溝底は平底で、覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物は少量の土器片を出土したが、図示できたものはない。

SD044 (第10図 図版3)

6H-43から6H-70に位置する。北東から南西に延びる溝である。調査区内の総延長は8.38m、上幅0.60m～0.90m、下幅0.40m～0.75m深さ0.02m～0.14mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物は少量の土器片を出土したが図示できたものはない。

SD045 (第10図 図版3)

6H-53から6H-63に位置する北東から南西に延びる溝である。調査区内の総延長は2.20mで、上幅0.35m～0.50m、下幅0.20m～0.28m、深さ0.06m～0.08m、溝底は平底で、覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物はない。

SD046 (第10図 図版3)

6H-55から6H-63に位置する北東から南西に延びる溝である。途中SD052・SD053に切られる。調査区内の総延長は4.76m、上幅0.55～0.70m、下幅0.30～0.50m、深さ0.07～0.17mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物は少量の土器片が出土したが図示できたものはない。

SD047 (第10図 図版3)

6H-64から6H-82に位置する北東から南西に延びる溝である。調査区内の総延長は5.38mで、上幅0.70m～0.80m、下幅0.40m～0.55m、深さ0.07m～0.13mを測る。溝底は平底で覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物は少量の土器片が出土し、1点の土器が図示できた。

SD048 (第10図 図版3)

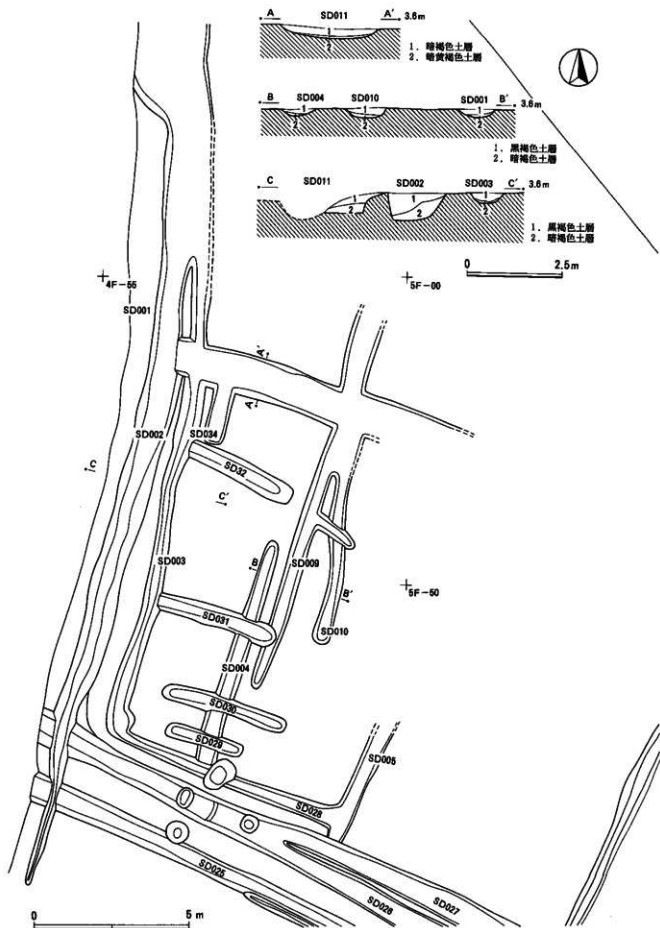
6H-73から6H-82に位置する北東から南西に延びる溝である。調査区内の総延長は3.32m、上幅0.35m～0.50m、下幅0.25m～0.31m、深さ0.11m～0.16mを測る。溝底は平底で覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物はない。

SD049 (第10図 図版3)

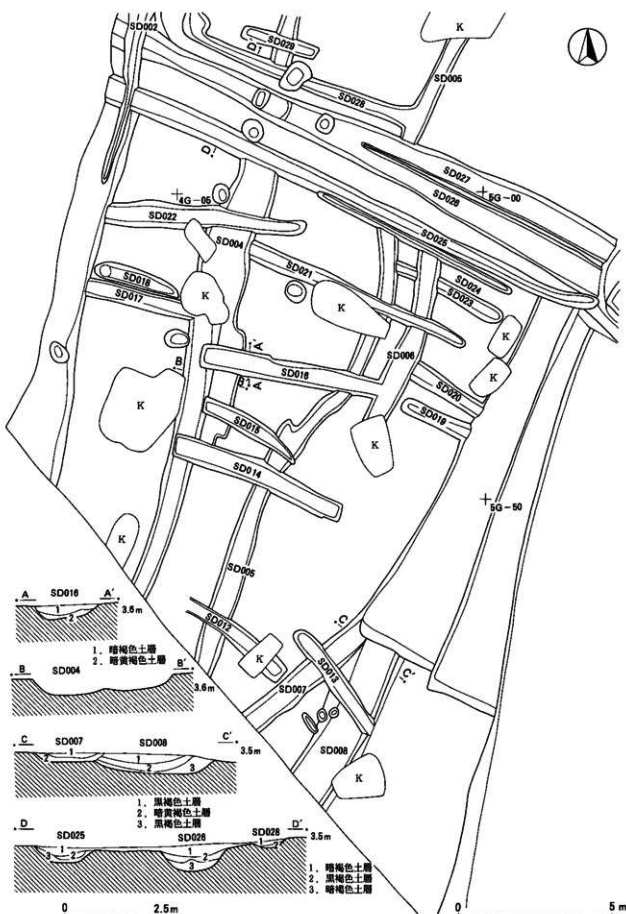
6H-55から6H-83に位置する北東から南西に延びる溝である。途中SD052に切られ、南側はSK001に流れ込む。調査区内の総延長は5.28m、上幅0.50m～0.53m、下幅0.30m～0.32m、深さ0.04～0.11mを測る。溝底は平底で覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物はない。

SD050 (第10図 図版3)

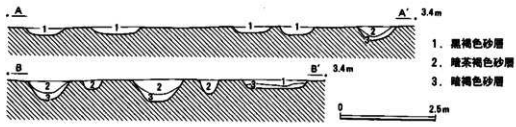
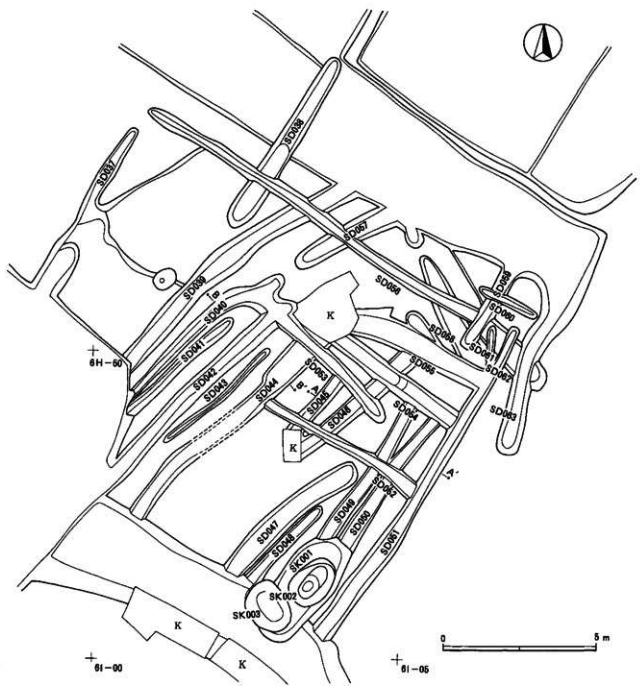
6H-55から6H-83に位置する北東から南西に延びる溝である。途中SD052に切られ、南側はSK001に流れ込む。調査区内の総延長は、5.09m、上幅0.45m～0.65m、下幅0.18m～0.42m、深さ0.06～0.22mを測る。溝底は平底で、覆土は黒褐色砂層が主体である。出土遺物はない。



第8图 沟渠测图(1)

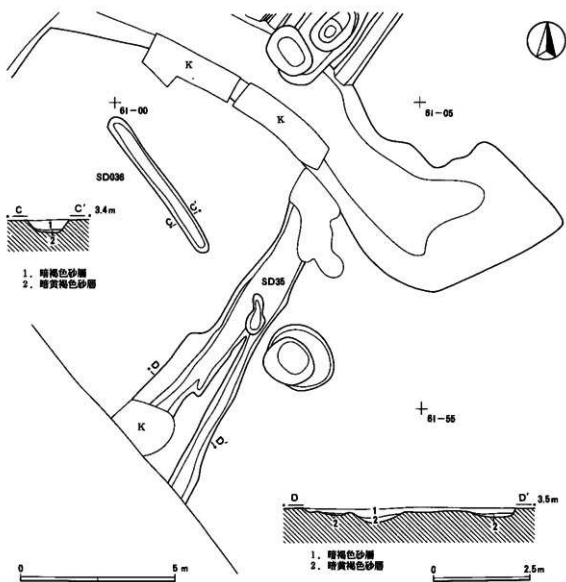


第9図 溝実測図(2)

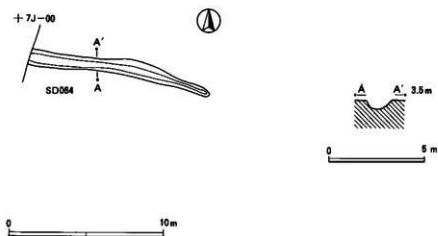


1. 黑褐色砂層
2. 暗茶褐色砂層
3. 暗褐色砂層

第10圖 溝突測圖(3)



第11图 溝実測図(4)



第12图 溝実測図(5)

第1表 溝計測表

遺構番号	全長	上幅	下幅	深さ	方向
1	33.62	0.40~1.00	0.35~0.95	0.11~0.18	南北
2	25.64	0.25~1.03	0.05~0.80	0.05~0.27	南北
3	15.76	0.40~0.70	0.18~0.31	0.08~0.23	南北
4	24.48	0.46~1.78	0.25~1.40	0.03~0.20	南北
5	22.80	0.50~0.80	0.30~0.60	0.01~0.09	南北
6	5.69	0.70~0.92	0.45~0.65	0.07~0.14	南北
7	4.92	0.82~0.98	0.50~0.60	0.05~0.08	北東~南西
8	5.39	1.70~1.82	1.00~1.28	0.14~0.31	北東~南西
9	12.31	0.40~0.60	0.25~0.30	0.12~0.14	南北
10	5.51	0.50~0.65	0.25~0.40	0.02~0.11	南北
11	9.72	0.12~0.13	0.95~1.00	0.05~0.11	東西
12	4.00	0.50~0.70	0.30~0.35	0.01~0.13	北東~南西
13	4.15	0.55~0.60	0.30~0.40	0.07~0.10	北東~南西
14	5.89	0.70~0.80	0.40~0.55	0.03~0.10	東西
15	3.56	0.20~0.65	0.10~0.35	0.03~0.09	東西
16	6.01	0.65~0.80	0.40~0.50	0.08~0.11	東西
17	3.67	0.50~0.60	0.30~0.40	0.18~0.23	東西
18	2.90	0.20~0.60	0.20~0.30	0.11~0.18	東西
19	2.40	0.50~0.65	0.15~0.20	0.02~0.09	東西
20	2.58	0.55~0.70	0.25~0.40	0.10~0.32	東西
21	7.70	0.40~0.60	0.20~0.30	0.05~0.12	東西
22	6.51	0.45~0.90	0.30~0.40	0.04~0.14	東西
23	3.80	0.40~0.60	0.20~0.30	0.02~0.04	東西
24	7.10	0.20~0.30	0.08~0.13	0.47~0.53	東西
25	17.70	0.40~0.90	0.15~0.63	0.05~0.23	東西
26	17.80	0.55~1.10	0.45~0.81	0.09~0.24	東西
27	8.91	0.70~1.00	0.45~0.70	0.04~0.21	東西
28	8.42	0.40~0.55	0.15~0.40	0.08~0.13	東西
29	2.55	0.45~0.50	0.20~0.25	0.13~0.21	東西
30	4.25	0.50~0.65	0.20~0.30	0.10~0.15	東西
31	4.01	0.55~0.75	0.25~0.40	0.11~0.14	東西
32	3.68	0.60~0.70	0.28~0.31	0.08~0.16	東西
33	1.48	0.40~0.50	0.20~0.22	0.03~0.11	東西
34	1.92	0.65~0.67	0.48~0.50	0.15~0.17	南北
35	9.08	0.14~0.28	0.25~0.12	0.07~0.17	北東~南西
36	5.41	0.55~0.60	0.25~0.31	0.09~0.22	北西~南東
37	6.05	0.35~1.00	0.20~0.50	10.2~14.5	北東~南西
38	6.50	0.24~0.65	0.15~0.30	0.02~0.07	北東~南西
39	9.35	0.70~1.00	0.30~0.40	0.09~0.23	北東~南西
40	6.11	0.30~0.65	0.10~0.26	0.03~0.07	北東~南西
41	4.60	0.31~0.40	0.10~0.15	0.04~0.10	北東~南西
42	8.18	0.60~0.70	0.25~0.40	0.17~0.23	北東~南西
43	4.56	0.20~0.25	0.04~0.08	0.15~0.18	北東~南西
44	8.38	0.60~0.90	0.40~0.75	0.02~0.14	北東~南西
45	2.20	0.35~0.50	0.20~0.28	0.06~0.08	北東~南西
46	4.76	0.55~0.70	0.30~0.50	0.07~0.17	北東~南西
47	5.38	0.70~0.80	0.40~0.55	0.07~0.13	北東~南西
48	3.32	0.35~0.50	0.25~0.31	0.11~0.16	北東~南西
49	5.28	0.50~0.53	0.30~0.32	0.04~0.11	北東~南西
50	5.09	0.45~0.65	0.18~0.42	0.06~0.22	北東~南西
51	11.89	0.30~0.70	0.20~0.28	0.06~0.21	北東~南西
52	5.78	0.35~0.60	0.11~0.40	0.03~0.14	北西~南東
53	6.08	0.50~0.60	0.20~0.30	0.04~0.20	北西~南東
54	4.68	0.65~0.68	0.38~0.40	0.17~0.31	北西~南東
55	4.80	0.80~0.90	0.50~0.70	0.14~0.37	北西~南東
56	12.72	0.41~1.00	0.15~0.71	0.03~0.14	北西~南東
57	3.62	0.65~0.73	0.38~0.49	0.54~0.19	北東~南西
58	4.21	0.50~0.80	0.30~0.60	0.11~0.18	北西~南東
59	2.96	0.50~0.52	0.30~0.40	0.06~0.22	北西~南東
60	2.10	0.25~0.30	0.10~0.15	0.13~0.21	北東~南西
61	1.40	0.25~0.28	0.23~0.30	0.12~0.07	南北
62	2.72	0.80~0.90	0.58~0.69	0.06~0.16	北西~南東
63	5.58	0.50~0.90	0.30~0.40	0.02~0.07	北東~南西
64	11.80	0.45~1.10	0.50~0.70	0.08~0.11	東西

2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器127点、須恵器83点、陶器27点、磁器95点、石製品6点で総数338点である。数としては多くないが、古墳時代の土師器が出土したこと、8、9世紀の土師器、須恵器がまとまって出土したこと、中世の陶磁器が出土したことなど、この依古島が各時代を通じ生活の場であったことを示すものである。

SK001 (第13図 図版4)

1は、須恵器の杯である。口径13.48cm、底径6.9cm、器高4.8cmであり、色調は赤褐色で、胎土に白色砂粒を含む。底部及び体部下端に回転ヘラ削りが施されている。胎土、焼成から考えて、千葉市域の産であろう。2は、須恵器の杯で、色調は暗灰色、胎土には白色砂粒赤色スコリアを多量に含む。手持ちヘラ削りがなされる。千葉市域の産であろう。3は須恵器の甕の口縁部破片で色調は黒褐色である。4～6は土師器甕で整形は縦方向のヘラケズリで横方向のナデである。胎土には白色砂粒を含む。7は、須恵器甕の胴部破片である。色は黒灰色で、胎土に白色砂粒を含む。外面に叩き目が入る。8は、須恵器甕の胴部破片で、色調は黒灰色であり、外面に平行な叩き目が入る。内面はヨコナデである。9は、ロクロ土師器高台付杯の高台のみの残存である。高台の径は6.2cmで、色調は淡褐色で胎土に白色砂粒を含む。外面はヨコナデ、内面にミガキが入る。

SK004 (第14図 図版4)

10は、SK004出土の須恵器の杯である。口縁部は1/2の残存で、底部は完形である。口径11.8cm、底径6.8cm、器高4.1cmであるが、左右のゆがみが大きい。色調は灰褐色である。調整は、口縁部は横ナデで、底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施され、底部中央には、回転糸切り痕が残る。墨書の痕跡があるが、上部が欠けているために判読は不可能である。千葉県産の製品であると思われる。

SK005 (第15図 図版6)

11は、古瀬戸の碗の底部である。高台径4.5cmで、口縁部上半が欠損している。内面は、オリーブ灰の釉薬が流れる。高台は削り出し高台である。15世紀後半の製品と考えられる。

SD002 (第16図 図版4)

12は、須恵器の杯である。口径13.8cm、底径7.4cm、器高4.0cmである。色調は黒褐色で、胎土に白色砂粒を多く含む。底部及び体部下端には手持ちヘラ削りがなされる。千葉市域の産であろう。13は、土師器杯で、口径12.3cm、底径7.6cm、器高3.5cmで、色は外面は淡褐色内面は暗褐色で胎土に白色砂粒を多く含む。底部は一定方向の手持ちヘラケズリで調整されている。底部に墨書の痕跡あるが、一部分だけなので判読はできない。

SD004 (第16図)

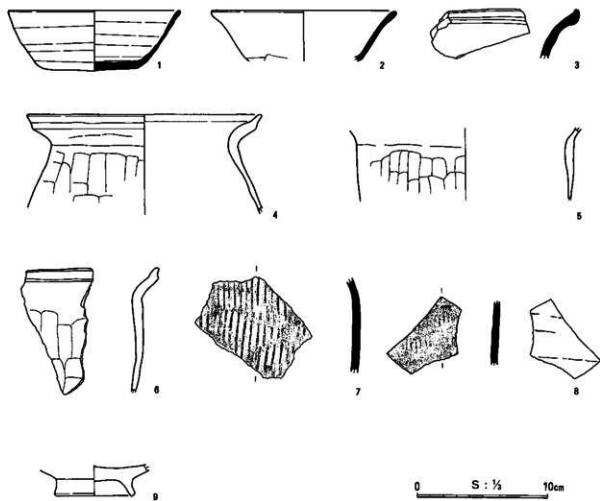
16、17、18は、須恵器の甕の底部片である。色調は、黒色、灰褐色であり、胎土に白色砂粒を含む。外面は、縦・横方向のヘラ削りが施され、底部は無調整である。

SD007 (第16図 図版4)

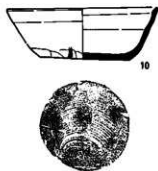
15は、須恵器の杯である。口径14.0cm、底径6.6cm、器高3.9cmである。色調は外面は灰赤褐色、内面が灰色で、胎土に白色砂粒を含む。調整は、口縁部はヨコナデで底部及び体部下端に、手持ちヘラケズリが施されている。千葉市域産の製品であると思われる。

SD008 (第16図 図版5)

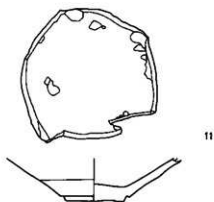
19は、須恵器の大甕の胴部片である。同じ個体の破片が遺構外からも出土している。色調は、外面は灰



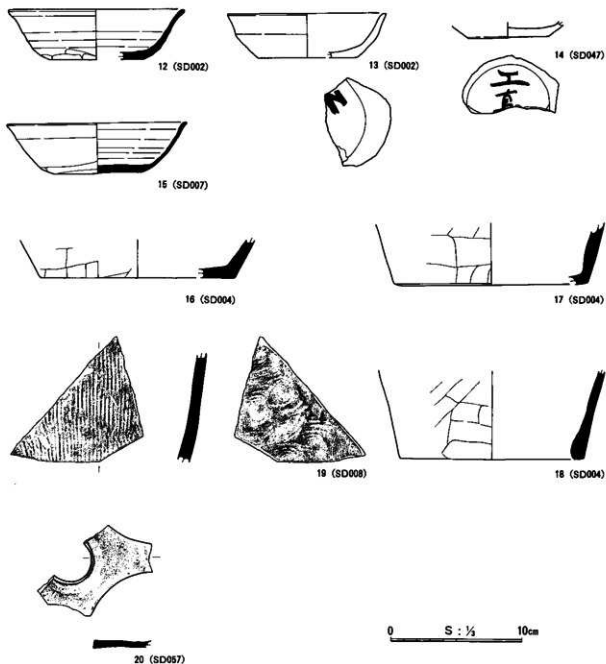
第13图 SK001出土遺物



第14图 SK004出土遺物



第15图 SK005出土遺物



第16図 溝出土遺物

色、断面は灰白色で、胎土に白色砂粒をわずかに含む。外面には平行叩きの痕があり、内面には同心円の当て具痕がある。東海地域産であろう。

SD047 (第16図 図版5)

14は、ロクロ土師器杯である。底径は、6.4cmである。色調は、外面が灰褐色で内面は褐色である。胎土に白色砂粒と赤色スコリアを少量含む。底部は一定方向のヘラ削りで、内面にはヨコナデ後に部分的にミガキをかけている。底部中央に「工圓」の墨書がある。

SD057 (第16図 図版4)

20は、須恵器五孔式甗の底部片である。色調は灰褐色で、胎土に白色砂粒を多く含む。調整は内面はナデで、外面は無調整である。

遺構外出土遺物(1) (第17図 図版5・6)

21は、古墳時代の埴の口縁部破片である。色調は赤褐色である。一部に赤彩の痕跡が見られる。下部にヘラケズリの痕跡がある。22は、須恵器の高台付杯の底部破片である。小破片のため点線で予想される形状を示した。色調は、外面は灰色で内面は暗灰色である。胎土に雲母片を多く含むので茨城産と考えられる。高台は削り出し高台と考えられる。

23は、ロクロ土師器の碗である。口径16.4cmで、色調は灰褐色、胎土に白色砂粒を多く含む。調整は内面全面に細かなミガキが入っている。24は、土師器杯である。口径13.4cmで、色調は淡赤褐色で、胎土に白色砂粒を多く含む。調整は、口縁部は横方向のナデで、底部及び体部は手持ちのヘラケズリである。25は、ロクロ土師器の杯か碗の底部である。底径7.8cmである。色調は褐色で胎土に白色砂粒、赤色スコリア、白色針状物質を含む。底部及び体部下端は、回転ヘラケズリである。26は、須恵器杯である。口径13.6cmであり、色調は黒色で胎土に白色砂粒を含む。27は、須恵器杯である。底径7.2cmである。色調は外面は灰赤色、内面は暗灰赤色で、胎土には、白色砂粒を極めて多く含む、赤色スコリア粒を含む。調整はヨコナデで、底部は、手持ちヘラケズリである。千葉市域産と考えられる。28は、須恵器杯である。底部は完形で、底径6.4cmである。色調は外面が赤褐色、内面は灰色で、胎土に白色砂粒を多く含む。調整はヨコナデで、底部は手持ちヘラケズリであり、糸切り痕が残る。千葉市域産と考えられる。29は、須恵器甕である。口径26.6cmで、色調は外面は灰赤褐色で、内面は灰褐色である。胎土に白色砂粒を含む。千葉市域産と考えられる。

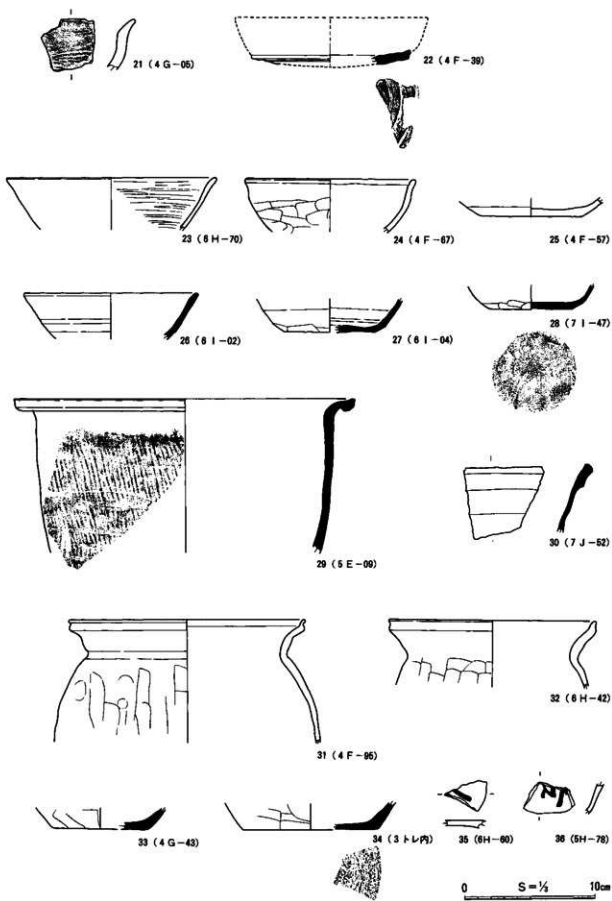
30は、須恵器甕口縁部の破片である。色調は内外面とも黒色で、胎土に白色砂粒を含む。調整は内外面ともヨコナデである。千葉市域産と考えられる。31は、土師器甕で、口径18.4cmを計る。色調は灰褐色で胎土に白色砂粒を多く含む。32は、土師器甕である。口径16.2cmで、色調は赤褐色で、胎土に白色砂粒を含む。33は、須恵器杯の底部の破片である。底径7.2cmで、色調は外面が灰色で内面は灰褐色を呈する。胎土に白色砂粒を多く含む。調整は内面はヨコナデで、外面は手持ちヘラケズリである。34は、須恵器甕の底部の破片である。底径10.6cmで、色調は黒褐色、外面の一部は黒赤褐色で、調整は内面はナデ、外面は横方向のヘラケズリ、底部外面に縄目状の圧痕がある。35、36は、土師器杯の底部片である。下部に墨書痕跡がある。

遺構外出土遺物(2) (第18図 図版6)

37は、中世の常滑系の陶器のすり鉢の底部破片である。底径10.6cmで、色調は外面は小豆色、内面は暗灰色である。調整は外面は粗いナデで内面にはスリ面がある。底部は、無調整である。

遺構外出土遺物(3) (第19図 図版6)

38、39は、ほうろくの内耳部分である。40～43は皿型の灯明皿である。43は外面を欠いてある。44も灯明皿である。45～48は瀬戸系の陶磁器である。18世紀の製品であろう。49は石臼の破片である。50～53は、砥石である。



第17図 遺構外出土遺物(1)



37 (5F-85)

0 S : 1/2 10cm

第18図 遺構外出土遺物(2)



38 (3トレ)



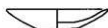
39 (3トレ)



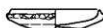
40 (3トレ)



41 (3トレ)



42 (3トレ)



43 (3トレ)



44 (3トレ)



45 (3トレ)



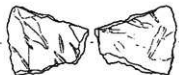
46 (3トレ)



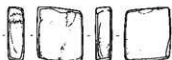
47 (3トレ)



48 (3トレ)



49 (3トレ)



50 (4H-26)



51 (8I-40)



0 S : 1/2 10cm

第19図 遺構外出土遺物(3)

Ⅲ ま と め

1 古墳時代

今回の調査で、古墳時代の遺構は検出されなかったが、遺物はSD002周辺から古墳時代の甕胴部片が20数点出土している。また、SD004から碗の口縁部片、SD008から赤彩の杯の破片が出土している。低地の微高地上で古墳時代の遺物の確認ができたのは貴重な成果である。

2 奈良・平安時代

今回の調査で一番遺物量が多かったのがこの時代である。植木畑として使用されていたため攪乱が激しく、住居跡としてははっきり捉えることができなかったが、SD004付近からは、甕・杯・甌等が集中して出土した。また、SK001 SK003は、水場近くの土坑であり、多くの土器が出土した。また溝も、この時代の遺物を伴うものがある。これら遺物の出土から8～9世紀にかけて生活の場が展開していたことは間違いない。

出土した土器の中でかなりの割合を須恵器が占める。これらの遺物は胎土、焼成から考えて多くは同じ郡内であった現千葉市土気にある南河原坂窯¹⁾や、千葉市の中原窯²⁾の遺物と思われるものが多い。

また、胎土の中に雲母が多く含まれた、茨城地域の新治窯の製品と考えられる削り出し高台の杯が出土したことも、成果の一つとして挙げられるであろう。茨城地域では、削り出し高台の遺物は、水戸市木葉下窯の製品中に見られる程度であり類例に乏しいものである。本例が新治産であると確実に同定できれば、新治産としては初めての類例になり注目されるであろう。

3 中世

大関城の存在していた時代の遺構は、SK005～SK007の土坑が3基である。SK005の土坑上部から古瀬戸の碗の底部が出土しており、これは15世紀の製品と考えられる。また、遺構外ではあるが常滑のこね鉢の破片も3片出土している。土坑の性格であるが、この土坑の南はすぐに低地になってしまい泥炭層が厚く堆積している。墓坑とも考えられるが、水辺の遺構の可能性もある。

今回の調査区では、土塁や堀といった直接的な城の施設は検出できなかった。また、中世の遺物が極めて少量であったことから館の部分からは外れていると考えられる。前述の通り、古い地図を見ると大門から入ってきて、数軒の人家が集まる辺りに、約130m四方の方形区画が認められ、この部分に館跡があった可能性が高い。(第2図)現にこの人家が集まっている場所が、標高が高く安定している土地である。また、後場と呼ばれる辺りに井戸があったという言い伝えもあり、この辺りの水が依古島の中で一番良い水であると言われている。大関神社はこの方形区画の北の隅に当たる。

この方形区画の北側が今回の調査範囲である。多数の溝群が2か所で発見され、その間に挟まれた部分は地山が低く、さらに中溝方面に続いていることが判明した。本来「中溝」とはこの水田の低地部分を目指したものでなかったかと考えられる。この部分はわずか60cm掘ると水が湧き出し排水に苦労した。雨の降った後は、エンジンポンプにより強制的に排水しなければいつまでも水が溜まったままで、沼のような状態であった。おそらく城があった当時は堀の役目を果たしていたのであろう。

一説に二の丸とされる北幸谷方面への連絡路は、大関神社前から北東に向かう現道及び、北西側の溝群が発見された部分と考えられる。このうち後者では、SD004、SD009、SD010が実際に使用された道であった可能性が強い。

- 注1 村田六郎太・松原典明 1996「南河原坂窯跡群」『土気遺跡群Ⅶ』(財)千葉市文化財調査協会
2 関口達彦 1990『千葉市中原窯跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
3 井上義安ほか 1986『常陸木葉下窯跡』水戸市木葉下発掘調査会

写 真 图 版



大関城



調査区遠景 (南東から)



調査前遺跡近景 (北西から)



調査前遺跡近景 (南東から大関神社方面)



調査前遺跡近景 (南東から微高地部分)



SK001 遺物出土状況 (南西から)



SK002・SK003 (南東から)



SK004 (南西から)



SK005・SK006 (北から)



SK005 遺物出土状況



SK007 (南東から)



SD001～SD003 周辺 (南から)



SD004 周辺 (北から)



SD005・SD006 周辺 (北から)



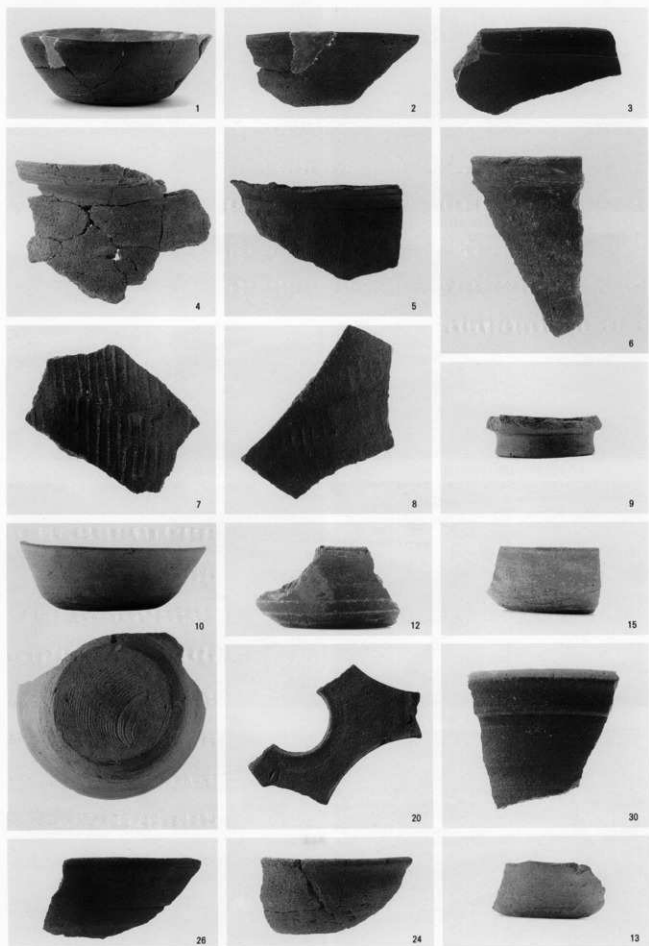
SD016・SD017 周辺 (東から)



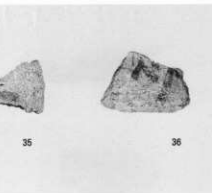
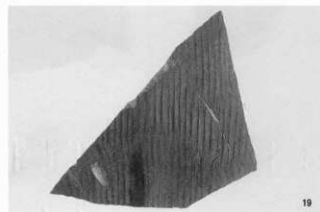
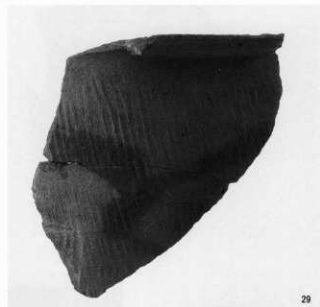
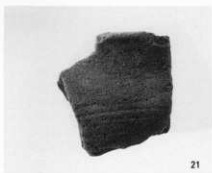
SD045～SD062 周辺 (北東から)



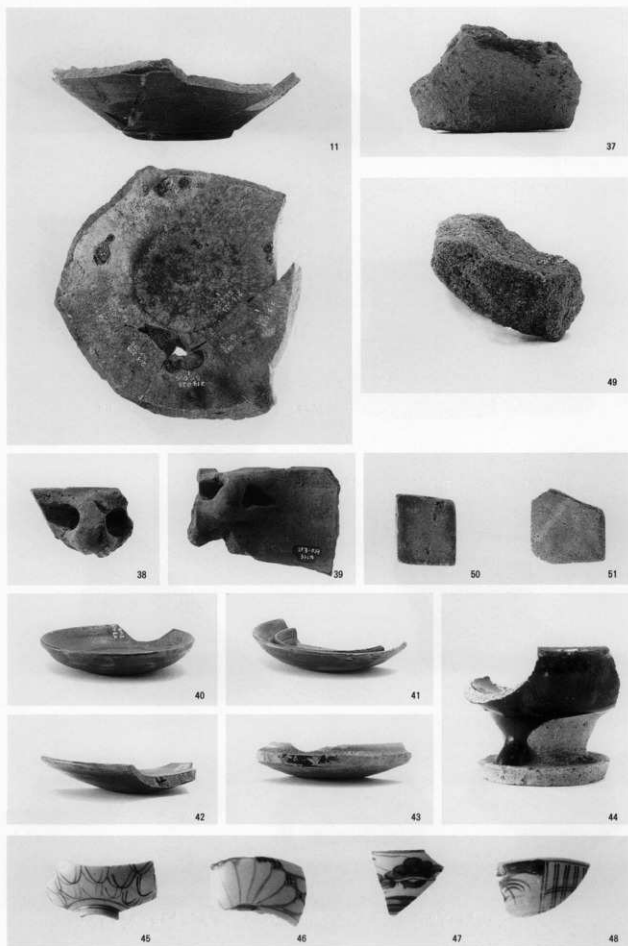
SD052・SD053 周辺 (東南から)



遺物 1



遺物 2



報告書抄録

ふりがな	とうがねしおおせきじょうあと							
書名	東金市大関城跡							
副書名	東金九十九里有料道路埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第301集							
編著者名	平野雅一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		町村	遺跡番号					
大関城跡	東金市依古島字中 溝75-3 ほか	12213	023	35° 31' 17"	140° 31' 16"	1996. 6. 3 ~ 1996. 8. 31	12,000	道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大関城跡	包含地	古墳時代			土師器			
		奈良・平安時代	溝 土坑	16条 4基	須恵器・土師器			
		中世	土坑	3基	陶磁器			
		中・近世	溝	48条	陶磁器 石製品			

千葉県文化財センター調査報告第301集

東金市大関城跡

— 東金九十九里有料道路埋蔵文化財調査報告書 —

平成9年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 道 路 公 社

千葉県中央区中央4-13-28

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿波809-2

印 刷 株式会社 正文社

千葉県中央区都町2-5-5
